家を獲得する人々

――ブラジルの住宅事情――

小玉文子

■サンパウロのファベーラ。このファベーラは危険なため入れなかった。

あなたは今どんな所に住んでいますか。戸建て住宅、マンション、アパート……。まさか路上生活をしたり、人の土地や家に勝手に住んでいるなんてことはないだろう。私は海外に旅行に行くたびに、人々がどのような住居で生活しているかを見聞しノートに記録している。今回は数年前に日本の反対側ブラジルに旅行した際に、現地に住む日系三世の友人に案内してもらい、人々の暮らしぶりを見てきたことを報告する。

地球の反対側へ……

ブラジルまでは島根から丸二日かかった。朝、松江駅をやくもで出発、昼過ぎに関西国際空港に到着した。一カ月の滞在予定だったので、家にある中で一番大きいトランクを担いで出発した。そして関空からサンフランシスコまでが約九時間。サンフランシスコで待ち時間が三時間。さらに六時間かけてワシントンDCに飛び、そこからサンパウロ空港までが十時間。本当に疲れた。

まず初めに降り立ったサンパウロ市では、急激な都市化、貧困、都市インフラの未整備という三つの条件が重なり、いたるところで住宅問題が引き起こされていた。ブラジルの人口は約一億八千万人で、サンパウロやリオデジャネイロなどの大都市圏を抱える南東地域への集中が著しい。就業人口の大半は肉体労働者である。貧富の差が激しく、近年失業者や低所得者の増大により、貧困問題が深刻化している。そうした状況のなか、低所得者が向かう住宅は大きく五つのケースに分けられる。

①都心にある空きビルを団体で不法占拠して暮らすケース。

②ファベーラと呼ばれているスラムで暮らすケース。

③ホームレスを支援する宗教団体や、市などからの投資によって成り立つ収容施設（収容期間は決まっている）で暮らすケース。

④都市インフラ未整備の土地を安く買い求め、自力で家を建築するケース。

⑤もともと一家族用だった住宅に複数家族が居住するケース（コルチッソと呼ばれる）。

もちろんこの限りではなく、路上生活を余儀なくされている人もいる。ここでは、①～③の三つのケースについて紹介する。

二十二階建て、エレベーターなし

日本ではあり得ないことなので想像もつかないと思うが、不法占拠ビルの実態はすさまじい。都心に空きビルがあるとすぐに占拠して、住居として利用してしまうのである。複数の不法占拠団体があるのだが、最初にMTCという団体の占拠したビルを現地の方に案内していただき、見学した。MTCが占拠しているビルは多数あるそうだが、私が案内されたのは、もともとどこかの会社のテナントビルで、大きな二十二階建てのビルだった。二十二階の高層ビルにもかかわらずエレベーターはない。このため上階に住む人の中には、何日かに一度しか外出しない人もいるそうだ。二十二階なんて気が遠くなると思った。だが、ダウンタウ

■ファベーラの入り口にて。ガスボンベの向こう側が入り口。

ンの中心部に位置しており、立地条件はとても良い。

ビルの入り口には見張りが二人、大きな鉄の扉を背にして立っている。どこから持ってきたのか、古いカウンターがあり、老人が名簿のようなものを広げていた。人の出入りを記録しているのである。入り口の見張りと受付は、ビル内に会員以外の出入りがないかなどを、二十四時間体制で監視している。これらの仕事はビルに住む若者や、団体の幹部などで行われるという。団体の会員証のようなものもあり、写真付きだったりと本格的だった。

ほとんどが家族で居住しており、たくさんの子どもたちが走り回ったり泣きわめいたり、本当にアパートみたいで、違法性を全く感じさせなかった。人がやっとすれ違うことができる狭い階段を三階まで上がると、屋根のない広い廊下があり、たくさんの洗濯物が干してあった。電気、水道も通っており、料金は一家族ずつ均等に割って支払うとのこと。不法占拠でも、電力会社などは供給を断らないそうだ。

階段はゴミ置き場!?

本当に違法なのかと疑いたくなるくらい、人々はきちんと普通の生活をしており、設備も整い安全な住居だと感じた。だが、やはり日本の住宅のように清潔とはいえず、廊下の隅や階段の途中にゴミが溜まっているのが目に付いた。

ゴミの問題などから周辺地域住民たちの反対運動などで追い出されてしまうケースも多々あるという。だがビルが大きく組織化されているため、警察も手を焼いているらしい。そこに住む人を追い出しても、その後のビルの利用法があるわけでもなく、やはり不潔さや治安の悪化などが地域の人々の不安材料である。

彼らは都心のビルを占拠することをやめない。彼らが都心に住みたいと思うのには、いろいろな事情がある。例えば、職場に近い、職探しもしやすい、女性の場合には買い物が便利などの声が聞かれた。彼らの中の一人は、日用品一つ買うのにも、郊外に住むと大変であり、交通費の問題もあると言っていた。貧しく、車などの交通手段を持たない人たちにとって、都心に住むというのはそれだけ大きい意味をもつのだ。郊外に貧しい人々を追いやる金持ちや政府への反発の念も込められているのではないかと思った。

乗っ取りビル　パート2

次に、MMCという団体のリーダーとコンタクトが取れたため、MMCの占拠ビルも見に行った。MMCはポルトガル語のMOVIMENTO DE MORADIA DO CENTROの略で、「中心街に住居を求める運動」といった意味である。MMCは先のMTCと同様、空きビル占拠の団体で、サンパウロ都心の占拠ビル二階にコンピューターや電話もある事務所をきちんと構えていた。入り口には同じく見張りが二十四時間体制で立っている。住人のほとんどは近辺の路上で露店商をしているという。もちろん占拠ビルなので家賃はタダ、光熱費等はビル全体分を各家族に割り振る。

そういえば、MMCのビルに着くまでの道のりにはたくさんの露店が並んでいた。その数はとても多く、一見したところ買い物客よりも露店の方が多いくらいだった。丸一日働いてもたいした稼ぎにはならないだろうと思った。「他の仕事はないのですか?」とリーダーに尋ねると「あっても彼らは読み書きができないので、できる仕事が限られてしまう。貧しい子どもたちは学校には通えず、親も読み書きができないことが多い。この国では、読み書きができない人が多い」と説明してくれた。

スラム街へ……

さて、次はファベーラと呼ばれるスラム街だ。

都市の周辺部の公有地や劣悪な条件の土地（急勾配地や水はけの悪い土地）に建てられた低質な、「家」と呼べないようなバラックの密集地域をファベーラという。ファベーラは、①土地の不法占拠と建物の不法建築という二重の意味での違法性、②セルフ・ビルド、③都市周辺

■占拠ビル。入り口にはMMCの旗が掲げられている。

■ファベーラ内の通路。

部に多い、という特徴がある。ファベーラについての資料は少なく、居住人口など、きちんとしたことはわからない。ファベーラ内の治安は非常に悪く、警察も足を踏み入れたがらない地域ということで、研究者たちも恐れて深入りしないというのが現状のようだ。もちろん一般市民も近寄らず、得体が知れないままどんどんと拡張してきたようである。

　このファベーラ内の見学はとても危険なため、バッグやカメラ、ビデオ、録音機器など一切の持ち物の持ち込みを控えるように言われた。サンパウロ市内のファベーラの道は、車などはとても通れないほどの狭さで、もちろん舗装もされておらず悪臭がした。

悪臭の中を

　初めに行ったファベーラでは、そこを管理している管理人と一緒に歩いて回った。水はけの悪い急勾配地にたくさんのバラックのような家が密集していた。全体的に腐敗臭が立ち込めていて、道の脇にはどろどろとした便や腐った食品があり、ハエがたかっている所もあった。しかし人々に「ボンディア」と挨拶すると皆元気に返してくれた。

　もともとは、仕事を求めて移住してきた人々が、仕事を始めるまでの仮住まいとして都心近くに自らの手で建てたというファベーラ。彼らはサンパウロという大都市には仕事があると思い移住してきたのだが、都市と田舎の物価の差や、仕事になかなかありつけない、という現実に直面することとなる。そして、貧しさから脱却できず、ファベーラに居住し続けることになるのだという。当初ファベーラは、市外から移住してきた人が多かったが、最近の調査ではサンパウロ出身の人が半分以上の割合を占めているという。ブラジルの貧困化が進んでいる証拠だろう。

　サンパウロでも最大規模と言われるファベーラを見に行った。しかし、そこはギャングが支配しており、先日も麻薬取引や殺人があったそうで、住民の知り合いでもいなければ、中に踏み込まない方がいいと注意された。大きいファベーラのほとんどはギャングの支配下にあるという。

　道が狭くパトカーも入れないため、警察による手入れも入らない。銃を所持している人も多いので徒歩でのパトロールは危険だ。暗黙の了解といった感じで、麻薬取引は行われている。私は、まだ死にたくなかったので、その大きいファベーラについては、丘の上からの見学で我慢した。

リオのファベーラ観光

　さて、サンパウロのファベーラとは一風変わった雰囲気を持っていたのは、リオデジャネイロで見たファベーラである。徒歩で全部回ったら丸一日かかるのではないかというくらい大きなファベーラだった。現地の女の子に半日がかりで案内してもらった。リオはサンパウロとはかなり違った地形の都市だ。リオのカーニバルで有名である。

　起伏の激しい山の斜面を裂くようにしてファベーラは広がっていた。不法占拠地なのに、そこには学校や商店、保育園、女性だけが働ける縫製場などがある。つまり、スラムの中だけで生活が成り立つようなつくりになっているのだ。保育園ではたくさんの子どもたちが楽しそうに遊んでおり、縫製場にいた女性は「私たちは、自分たちの力でここまで頑張ったのよ」と得意そうに言った。

　ここは近年ファベーラ観光も行っているらしい。メディアにも取り上げられるようになり、リオの観光名所の一つになりつつある。そこに住む人々は、活気に満ちあふれ、生きることに努力していた。ただ、やはり立地条件は悪いので、大雨や台風などの自然災害により崩壊してしまうファベーラはたくさんあり、その度に何人もの命が奪われている。命がけの住宅だ。それでもなお、家は建つ。

初めてのATM

　最後に紹介するのは、宗教団体や市などが提供する収容施設である。サンパウ

■自力で家を建築する人々。

■宗教団体が提供する収容施設。外観は工場か倉庫のよう。

ロ市にはこういった施設が数多くあるというが、その中で最も設備が充実しているというキリスト教系の施設へ足を運んだ。シスターが入り口で迎えてくれた。宿泊している市内のホテルからタクシーで四十分もかかり、立地的にはやはり郊外に近いといえる。入り口に銀行のATMがあり、エントランスになっていた。貧しい人々が暮らす施設のはずなのになぜなのか、不思議に思っていたら、まあ、とりあえず見てくださいと中に通された。

施設の住民たちは、街で拾ったゴミを施設内にあるリサイクル場に集め、三段階くらいあるというリサイクルの初めの一段階まで加工し、古紙を作る業者などに引き取ってもらい生活している。その収入を、皆競うようにATMに預金するという。誰も、それまで住所不定などのため口座が開設できず、初めての口座開設が嬉しくて、楽しんで預けるという。それが、結果としてこのATMの利用率を引き上げているという。

ゴミを拾ったり、リサイクルペーパーを作ったりしながら、自分の生き方を見つめなおしている。どうして貧しくなってしまったのか、どうしたら今後の生活をより良いものにできるか。市から派遣されてくるスタッフなどとの会話や共同生活の中で失ってしまった自尊心を取り戻せるよう、向上できるよう、日々考えながら生活している。

施設内は、老人用ベッドやエレベーターなど、福祉面の設備も充実していた。食事は施設内の食堂で日本円で一食約二十円で食べられる。その他、貧しく孤独な人々は犬と路上生活をしていることが多いため、無料の犬小屋を設置してあった。超大型ランドリーや映画館などの設備も備えていた。ベッドは大きい倉庫のような空間にたくさん並べられているが、小さな子ども連れの人には、小さな個室が特別に与えられる。

施設内で職業訓練も受けられるそうだ。更正施設のように厳しい規則があるわけではなく、自由な雰囲気だった。しかし、もともとそこにあった古い倉庫をリフォームしてこのプロジェクトに使用しているため広大な敷地にあり、そのことが人々のつながりや、市から来た職員とのコミュニケーションを取りづらくさせているという問題もあるという。確かに施設内を見学しているだけでも足がとても疲れるくらい広かった。

カエルの養殖がしたい！

次にシスターは体育館に案内してくれた。体育館ではたくさんの人がパフォーマンスの練習をしていた。次の施設内の大道芸大会で発表するらしい。隅の方ではお年寄りと子どもたちが展示用の絵を描いており、近くに行くと恥ずかしそうに絵を見せてくれた。施設内をデジタルカメラやビデオで撮影しながら回っていたら、一人の男性が興味深そうに笑顔で語りかけてきた。

「これは今、ビデオを回しているが、自分はテレビに出られるのか？」

「いいえ、違いますよ。ただの見学ですよ。そんなテレビだなんて……」

通訳の友人にこう言ってもらったのにもかかわらず、彼は陽気にカメラの前で喋りまくった。

「日本で僕らがメディアに取り上げられるならこう言ってくれ！　僕は日本に働きに行きたい。一年でもいい。パスポートを作るお金を下さい！　僕は頑張ります。子どもが三人もいて、養っていくために日本へ行って働いてお金を貯めたいんです。そしてブラジルに帰ったら、食用ガエルの養殖をやります！　以前テレビでカエルの養殖をして成功した人を見たんです。僕に投資してください！」

この施設の住人たちはやる気はあるのだ。チャンスを摑もうと、一生懸命生活している。だが、何年もこの施設に入っていられるわけではない。最長で二年だそうだ。その後、また路上生活やファベーラに戻ってしまう人も少なくない。シスターはそう言って小さなため息をついた。

初めてブラジルへ行き、見るものすべてに驚いた。住宅の不法占拠やファベーラなど、日本ではあり得ないことに次々と出くわし驚いた。外務省のホームページでは、渡航の是非を検討せよ、と書いてあり、出発前は少し不安だったが、ファベーラなどで危険な目にあうこともなく無事に帰国した。今回の旅行で出会ったファベーラなどに住む人々は、明るく向上心が高かった。貧しいのにもかかわらず、顔は明るかった。そんな人々に私は元気をもらった気がする。日本は豊かだが、本当の豊かさとはなにか……と考えさせられた。

（こだま・あやこ／文化資源学系二年生）

「再生」の春

――モンゴルでの現地調査から――

井上　治

四月二十九日、浜田駅前のバス停で、広島行きのバスの中に大きな荷物をおさめる。今回は、福岡空港から北京を経由してモンゴルに向かう。この時期にモンゴルでフィールドワークをおこなうのは初めてだ。

桜の季節も終わり、まもなく五月になるこの日、気温は二十五度近くにまで上がり、取材のための精密機器や研究資料を入れたザックと、衣服とキャンプ用具などを詰めた大型のアタックザックを一人で担いで動けば、さすがに汗ばんでくる。こういうときに限って、島根がフィールドならどんなに楽かと思う。

■数十キロの荷を担いで

島根に来てから、メールやチャットやWebカメラで仕事ができる環境が整ったことも手伝って、中国、モンゴル、ロシアなど外国の仲間と共同研究やら共同執筆する機会が多くなった。友人の多くは、日本からグループを引き連れてやってくるが、わたしの場合、目的国の空港までの行程はたいてい一人で、現地でグループがそろうということが多い。

日本から研究旅団をつくって他国に乗り込むのは、その中にいる自分が、地域を研究する者として自立できていないことをあからさまにしているように感じる。最悪でも、現地の研究者と仲間を作る。日本人の仲間や日本にいる外国人とは組まない。自分がどれだけ外国で通用するのかを認識したいという考えが、最近までのわたしの地域研究者としてのこだわりとしてあったことも事実だ。

昔はひとりで八十キロの荷物を担いで中国辺境を三カ月ほど歩き回ったことがあったが、今はちょっと無理だと思い、去年は四十キロに荷を調整したが辛かった。もうだめだ、と限界を知ったので、今回は三十キロにおさえて軽くしたつもりだったが、それでも汗が噴き出た。国内に仲間を求めないことにこだわっているから、ひとりで荷物を担ぐことになるのだろうかと、これまでのこだわりをうらめしく思い出した。

福岡から予定通りのフライトで北京に到着し、定宿で一泊。翌三十日は朝八時のフライトで昼前にモンゴルの首都ウランバートルに到着。迎えに来ていたモンゴルの研究パートナーと挨拶を交わし、準備しておいた車でウランバートル市内へ向かう。

ウランバートルは富士山の五合目程度の高地にあり、札幌よりも北に位置し、典型的な内陸性気候のところなので、寒冷で乾燥が激しい。日本でかいたような汗は一滴もでてこない。思っていたよりも寒くはなかったが、吐く息はまだ白い。そもそも降水量の少ないところだが、春はとくに降水が少ない。走っている道の左右の草は黄色っぽくなっている。

アパートに荷を下ろして、モンゴル側のもうひとりの研究パートナーと三人で、明日の事前準備と旅行行程について打ち合わせをおこなったのち、宿に戻って機器の調整をおこなう。翌五月一日も穏やかな晴れ。午後から、一週間分の食糧を準備するために市内の大型スーパーに入り、買い物を終えて出てくると、冷たい風が吹きはじめ、少し雲が出てきた。翌五月二日は、ウランバートルから東に三百キロ進んでウンドゥルハーンという町に入り、そこから北に転じて行ける所まで進み、そこにホテルがあればホテルで、なければ野営と決め、明日朝八時に待ち合わせることとした。

■白樺樹皮の研究

モンゴルといえばすぐに「草原」と「遊牧」が思い浮かぶが、「草原」と「遊牧」は今回の調査旅行の目的ではない。最終的に目指す地点は、ロシアとの国境方面の「森林」である。モンゴル国では、北に森林地帯、中部に草原地帯、南に沙漠地帯と、比較的はっきりとした地理的特徴が帯状に分布している。今回のフィールドワークの目的は森林地帯に生えている「白樺」である。

ここ数年、モンゴル・中国の知人と共同で、モンゴル語が書き付けられた十七世紀頃の白樺の樹皮（「白樺文書」）を研究している。モンゴル国の西部と中部、中国新疆ウイグル自治区北部から出土したものなので、いったんクリーニングと修復・復元をしなければならず、文字を

読むまでに大変な思いをした。だいたいの解読のめどがたった一昨年からは、文字が書き付けられている白樺の樹皮について調べることにした。さっそく、ウランバートルで事前の調査を行ってみた。

判明したのは、モンゴルでは白樺樹皮で器などを製作して生活に利用することがほとんどなくなってきているが、モンゴル国の北東部に住むブリヤートと呼ばれるモンゴル系民族のところではまだ用いられているということであった。すぐにでもブリヤートの所へ行くべきであったが、手順としては、いま研究している白樺文書が出土した地点での白樺の状態や利用状況を調べるのが先であるので、昨年はモンゴル国の西部と中部、中国新疆ウイグル自治区北部で現地調査を行った。

■出発直前の横殴りの雪。ちょうど小やみになったところ。

新疆北部では、文書出土地点のかなり北方に居住するトゥバやウリャンハイという少数民族が白樺の樹皮で器物を製作し使用していることがわかったが、三カ所の出土地点その場所では、白樺樹皮の生活利用そのものがなくなっていた。そこで次回の調査は、今も樹皮を利用している可能性がきわめて高いブリヤートの住むモンゴル国北部の森林地帯を目指すことにしたのである。

二カ月ほどモンゴルの仲間と連絡を取り合い、白樺樹皮を用いるブリヤートはモンゴル国の北東部に位置するドルノド県のバヤンオール村とヘンティー県のダダル村というところにいること、樹皮を剝ぐのは春の四月下旬だということがわかった。日程調整を試みた結果、四月の末にならないと双方とも大学を休む機会がなく、おそらく樹皮剝ぎの時機を逸することだろうが、とにかく行ってみようということになり、今回の調査になったのであった。

■吹雪・砂嵐・野火

出発の朝、六時に起床。かなり寒い。窓を見ると、外は真っ白。視界がほとんどない。吹雪だ。気温はまちがいなく零下だ。防寒着を取り出しやすいところに移したり、機器類のパッキングを厳重にするなどしているうちに出発の時間になった。

降りは少しおさまったが、それでもまだ横殴りの状態だった。運転手は長年の勘でまちがいなく晴れると断言するし、時間を無駄にして途中で野営するよりも、少しでも目的地に接近しておこうということになった。走り出した車内はかなり冷え込んできて、吐く息が白く、窓につくと凍る。寒さに耐えきれず、防寒着を重ね着する。

しかし運転手の予言は的中し、雪はやんだ。だが風は相変わらず強く、視界はまったく開けず、あたりは黄色っぽく、そしてすこし薄暗くなった。砂嵐の中に入り込んだようだ。モンゴルは厳しい内陸性気候のところであり、乾燥が激しい。ちょっとの雨雪程度の水分はあっという間に乾く。折からの強風によって、乾いた地表面から軽い土が舞いあげられて砂嵐となる。

■吹雪がやみ、砂嵐が起こりはじめた。

しかし、どうも砂嵐の砂だけがわれわれの視界をさえぎっているのではないようだ。風上の方向に目をやると、地面のあちこちから白い煙が立っている。野火がおこっている。日本風に言えば山火事というところか。人間の不注意でおこる野火もあるが、自然発火の場合もある。風にあおられた砂塵が、乾燥しきった地表面やそこにまばら生える水気のない草に勢いよく当たる。このときの摩擦が原因で発火し、それを強風があおり乾燥が助けて、火事に発展するのだ。車から見た限りでも、いくつかの丘や森がすでに焼けてしまったことがわかった。この吹雪と砂嵐、野火は大規模になれば甚大な自然災害をもたらすが、モンゴルの春の風物詩のようなものだ。珍しい自然現象ではない。

■モンゴルの四季

昼にウンドゥルハーンに着いたが、砂嵐はおさまらない。近くのレストランに入ろうと車を出たが、目、鼻、口に容赦なく砂が入ってくる。走ってレストランに逃げ込み、食事をしている間に、砂嵐

がおさまった。暖かくなりはじめた。ここから道を北北東に転じ、ロシアとの国境方面を目指して進めるところまで進む予定である。

ようやく視界が開けてきた。と同時に、車内の温度が上昇をはじめる。着込んでいた防寒着を一枚一枚脱いで、日本の春に身につける程度の服装になっても、まだ暑く感じる。車窓を開けると砂埃が入ってくるので、開けない方がいい。隣の運転手はもう半袖Tシャツ一枚になっている。

温度計を見ると二十八度になっている。乾燥しているから蒸し暑いわけではない。汗もかかない。しかし暑さと乾燥のせいで喉が渇く。ミネラルウォーターに手を伸ばす。気温だけなら日本の初夏だが、トイレ休憩のために車外に出ると寒い。運転手は相変わらず半袖Tシャツ一枚だ。暑いらしい。その時に交わした会話が印象的だった。

運転手「モンゴルの春には四季が全部あるって、ちょっと前にいっしょに旅行した日本の学者が言ってたが、たしかにそうだ。今の暑さは夏だ」

わたし「運転手さんの今日の春はいつごろでした？」

運転手「さっきの砂嵐の時くらいだ」

わたし「たしかに、砂嵐にあうとモンゴルの春という感じがしますね」

モンゴルでは、夏の終わりから秋、そして冬への移り変わりがかなり早い。九月くらいから降雪があり気温が零下になりはじめ、十二月には零下三十度にまで下がる。八月くらいから、牧民は、冬のあいだの飼料や畜舎の冬支度のために、草をせっせと刈り備える。

モンゴル人が飼うウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギは、冬は黄色くなった草も食べるが、秋のうちに降りはじめた雪の下で〝冷凍保存〟されている秋の草も自分の蹄（ひづめ）で掘り出して食べることができる。刈った草ももちろん通常の冬の飼料だが、大雪のために家畜が雪をかいて草を食べられない時や、天気が荒れているため家畜を畜舎から草原に放って自然の草を食わせるのが危険な時など、何らかの事情で人為的に飼料を補充しなければならない事情が発生した場合に有効にはたらく。いうまでもなく、こうした事情がよく発生するから草を刈り貯めるのである。モンゴルの冬は、少しでも寒さや雪を避けて自然災害に備える知恵があってはじめて、人畜そろって無事に乗り切れる。そういう厳しさがある。

■厳しい春

そのような冬が終わってやってくるのが春だ。日本でならば、春一番が吹き、日に日に暖かさが増し、やがて桜が咲き、新緑が次第に濃くなっていく。冬の疲れを引きずりながらも何とはなしに心が軽い。徐々に陽光が強くなり、深緑へと移ろっていく。一方、モンゴルの春は、モンゴル人、とくに荒々しい自然のなかで牧畜を営む牧民たちにとっても、そして家畜にとっても、一番つらい時期かもしれない。

天候が不安定なのだ。三月中旬から上昇気流が発生して風が吹きはじめ、春の雪解けにつれて水分が大気に提供される。これが時に雪になり、強風と合わされば吹雪になる。野球のボールくらいの大きさの雹（ひょう）になるときもある。あるいは、強風が乾いた地表面の砂を巻き上げて砂嵐になる。しかも草原は乾き、場合によっては野火に見舞われる。

春は家畜の出産シーズンであり、牧民は子家畜の世話で忙しい。生まれたばかりの子家畜に限らず、貧弱な草でもって厳冬期を過ごした家畜の全てが体力を落としている。モンゴルの春は、疲れている人と家畜に、ある時には吹雪や雹、砂嵐を、冬の寒さと夏の暑さを容赦なく見舞うのである。この厳しい春を乗り切ってこそ迎えられる夏ということでもある。

この日は目的地には到達できず、その手前のノロブリンという村で宿泊することとした。ありがたいことにオンボロだがホテルがある。正直なところ、朝晩は氷点下になる野外でのキャンプにならず

■（上段）バヤンオール村の「森の老人」が白樺樹皮の器を作ってくれた。（下段）バヤンオール村の白樺の森。右から２番目が器の作者、右端が筆者。

に一同ほっとしたが、夜はとても冷え込んだ。冬山用のシュラフザックを準備してきてよかった。

■樹皮の器を作る老人

翌日は午前中にドルノド県のバヤンオール村に入った。ことばは悪いが、何の特徴もない寒村という感じのする、豊かとは思えないところだ。われわれは、事前に調べておいた老人を訪ね、こちらの用向きを伝えると快く応対してくれ、物置から樹皮をもってきて、さっそく作成に取りかかった。老人はもともとはエンジニアであって、樹皮で器物製作をはじめたのはごく最近とのことであり、昔見ていた製作の手順を思い出して作りはじめたのだという。

製作過程を写真やビデオに収めていると、老人の娘二人が血相を変えて飛び込んできた。老人の技術を盗み取ろうとしているのではないか、これ以上の取材はやめろ、とすごい剣幕だ。こちらは、白樺樹皮の加工技術の研究が目的で、器を作ることには全く興味はない、と説き伏せた。娘らによく聞いてみると、何でもウランバートルから商売人が来て、モンゴルの自然素材でできた器としてパテントの取得を持ちかけたのだそうだ。今のところは受注生産対応だが、このブリヤートの寒村では、老人だけが持つ技術は現金収入源として貴重らしく、いま娘たちが父親に樹皮器物の製法を学んでいる。

モンゴルが民主化し市場経済に移行してすでに十年を過ぎた。かつてモンゴル人が生活に利用した白樺樹皮の器は、モンゴル北部の「森の古老」が作ったそのこと自体がモンゴルの草原と森林を反映する民族文化資本となり、器は豊かな生活の実態から切り離されたところに生じたもうひとつの価値体系に所属するという逆転現象の中にその自己の存在を規定するのである。動機はともかく、技術の後継者が現れたことはよいことだ。

老人が作った器を五千トゥグリク（約五百円）で買い取り、老人とともに白樺林に入った。今回の旅の最大の目的は、白樺樹皮をどのように剥離し、それを器物や紙代わりのものの原料として加工するかを見ることであった。白樺の樹皮を剥がすのは、白樺が幹に雪解け水をたっぷり吸い込んでいる春の数日に限るとのこと。しかし、今はまだその時期ではないらしい。雪解けが遅れているというのだ。老人はのこぎりを白樺の幹にあててみたが、樹皮は剥がせるような状態ではない。あと数日ここにいるようにいわれたが、先の予定が詰まっているので、次の目的地ヘンティー県のダダル村に向かった。

■「再生」の実感

ダダル村はチンギス・ハーンの生地といわれるところである。草原と森林が入り組み、ところどころに湖がある大変美しいところである。夏が近くなれば草原に花が咲き乱れる。青い空、緑の草原、色とりどりの花、白い雲、鏡のような湖が視界に一気に入ってくるはずだ。

ここでは、国内屈指の狩人として知られた老人や地元のエリートとして高位の官僚を歴任した老人が白樺樹皮のことを記憶し、伝統的木工技術をもって市場経済の時代を生きようとする若い職人が伝統的技法を確実に継承していた。ここでも樹皮剥離と用材加工の過程はやはり時期が早く、実見できなかった。しかし、断片的な情報しか得ていなかった樹皮からの薬品採取を実演してもらうことができた。また、バヤンオール村の古老とは異なる方法で加工され柔軟性を高めた白樺樹皮で作られた器を入手することができた。

白樺を求めて旅したモンゴル北部の春の一週間、常に「再生」を意識させられた。毎年必ずやってくる夏という自然の最盛期に向かっての「再生」としての春を経験したこともさることながら、社会主義体制の計画経済から自由主義体制の市場経済への移行の中で、樹皮利用文化が、伝統的な民族の物質文化という価値をこえ、自然の形象そのものと化すことで価値を生じる新たな民族文化資本として「再生」しつつあることを実感した。

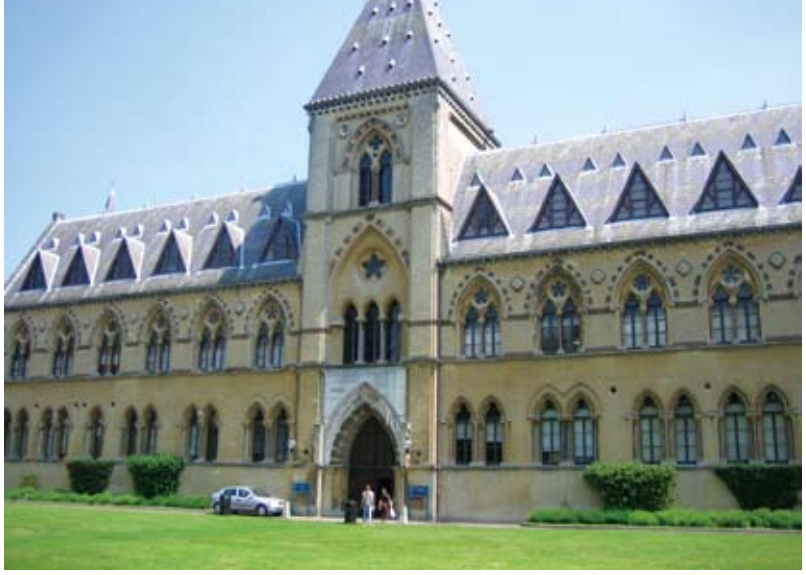
（いのうえ・おさむ／島根県立大学北東アジア地域研究センター長）■

■森と湖、空が美しいダダル村。草原はまだ茶色い。

■春の草原。緑がうっすらと「再生」しつつある。

イギリスでみつけた小さな「出雲」

小泉　凡



■ピット・リヴァーズ博物館。

約一年ぶりに、ヒースロー空港に降り立った。二〇〇六年六月六日。曇り空だがうっすらと陽がさすロンドンの昼下がりだった。いつもなら、パスポートコントロールを済ませ、そのまま通路を右奥へたどり、エア・リンガス（アイルランド航空）へと乗り継ぎ、ダブリンへ向うのだが、今回の目的はアイルランド行きではない。

ヒースロー・エクスプレスでパディントン駅に着いた頃にはあたりはだいぶ薄暗くなっていた。目的地のオックスフォードには明日の午後に立つ。この旅の目的は、オックスフォードで小さな「出雲」に出会うことだ。もっと具体的にいえば、ラフカディオ・ハーン（一八五〇―一九〇四）が松江滞在中に収集し、オックスフォード大学のピット・リヴァーズ博物館に寄贈した百十五年前の出雲地方の寺社のお札（ふだ）を調べることにある。

翌日は晴れて暑くなった。梅雨がないヨーロッパではこの六月が日も長く、一年で一番よい季節かもしれない。キュー・ガーデン（王立植物園）で見ごろを迎えるバラを楽しんでからオックスフォードに入ることにした。

オックスフォードへ向う三両編成の通勤列車は、夕方のラッシュアワーにさしかかる時間帯で混雑しており蒸し暑かったが、車内販売の飲み物が清涼感を演出する。多くの通勤客が黄金色のラガービールや琥珀色のエールを楽しみながら家路に向う。こんな贅沢な風景に感心していたら、私の席の少し手前でカートが空っぽになってしまった。残念ながら味覚まで享受することはできなかった。一時間ほどでオックスフォードに到着。予約していた街中の小さなB&Bのうなぎの寝床のような細長い部屋に荷物を置いて、パブで軽い食事を済ませてから明日にそなえて早目に床に着いた。

＊

翌朝、書店でオックスフォードの市街図を入手してから、博物館に向う。やや町外れにある博物館までは宿から歩いて十五分ほど。それにしても大学のキャン

■オックスフォード大学のキャンパス。

パスと住宅街の緑は実に美しい。その緑と花の調和、というよりむしろ緊張関係にある彩りのコントラストが実に鮮やかだ。

ピット・リヴァーズ博物館は、大きな建物だが、自然史博物館と共有しているので、展示スペース自体はさして巨大ではない。館内に入ると、単独の展示ケースに出雲大社の古伝新嘗祭・国造火継式の時に使う火鑽臼（ひきりうす）と火鑽杵（ひきりきね）があるのがすぐに目にとまった。イギリスで出会った最初の「出雲」だ。これは、檜の板につぎの棒で摩擦を起こし発火させるもので、現在でも熊野大社や出雲大社の神事で使用されている。展示品は一八七八年の古伝新嘗祭に使われたもので、ハーンが島根県尋常中学校の西田千太郎教頭を介し宮司の許可を得て送付したものである。この火鑽が西田宅に到着したのが一八九一年三月三十一日で、それをハーンが友人のチェンバレンに送付した経緯を伝える四月五日付け手紙が博物館に残されていた。

「建具屋があなたの火鑽のための素敵な小箱を作ってくれましたので、それは赤坂台町に速達で送られるでしょう」

その手紙には、杵築大社（出雲大社）と火鑽を提供する熊野大社との関係を、今日、神魂神社に行って調べてきたなどという興味深い内容も記されている。

こうしてチェンバレンのもとに火鑽は無事届けられ、四月二三日付けでチェンバレンから礼状が届く。

「貴重な火起し錐は、一昨日無事届きました。あなたに心から感謝いたしますとともに、この感謝の気持ちをどうか、ご親切にもこれを寄贈くださった方にお伝えいただきたく思います。この聖なる道具は心からなる尊敬をもって取り扱い、オックスフォード博物館の栄えある場所へと細心の注意をもって送り届けますこと、併せて先方様にお伝えください。」（『ラフカディオ・ハーン著作集』第十四巻）

■出雲大社の火鑽臼と火鑽杵。

確かにチェンバレンの言葉通り、現在もオックスフォード（ピット・リヴァーズ）博物館の最も目立つ場所に展示されている火鑽を見た時には、感動の余り胸があつくなった。

さて、チェンバレン（一八五〇―一九三五）とは当時帝国大学で言語学を講じていたイギリス人の日本学者で、ハーンとは最も親しく交流した人物のひとりである。チェンバレンは、当時、ピット・リヴァーズ博物館長だった、人類学者のエドワード・B・タイラー（一八三二―一九一七）とも親しい間柄だったので、出雲地方の宗教具や護符の収集については、タイラーからチェンバレン、チェンバレンからハーンへと依頼された経緯がある。したがって、この博物館にある一三二四点の日本の宗教用具のコレクションは「チェンバレンコレクション」と呼ばれ、そのうち三四九点を護符が占めている。今、世界で三大お札（ふだ）コレクションと呼ばれるのは、このほかにジュネーヴの民族学博物館にあるアンドレ＝ルロア・グーランによるものとパリのコレジュ・ド・フランス日本高等学研究所にあるベルナール・フランクによるコレクションを指すが、チェンバレンコレクションはその中でも最も古いお札コレクションである。

また、この博物館の経緯は、軍人で考古学者でもあったピット・リヴァーズ（一八二七―一九〇〇）が、私蔵していた世界の人類学的資料一万七千五百点を一八八四年にオックスフォード大学に寄贈したことによって基盤がつくられた。なお、現在の収蔵品数は百万点に達している。

＊

学芸員のゼナ・マックグリーヴィさんの待つ事務所を訪ね、あらかじめ取り出しておいてもらったハーンや出雲地方にゆかりの深い護符を見せてもらうことにした。白手袋をはめ、一点ずつ確認しながら撮影を行い、同時にゼナさんに該当資料をデータベースから検索し、プリントアウトしてもらうという作業手順で半

■城山稲荷神社の護符。

日かけて大方の資料撮影を終えた。次々と出てくる百十五年前の出雲のお札を手に取りながら、感動が微笑に変わる。概して現在の護符より大型のものが多く、箱玉串という板を紙で包んだ厚みのある護符も見受けられた。もちろん、護符の字も図柄もみんな木版刷りである。「城山稲荷神社」は「城内稲荷神社」と書かれていたり、美保神社や佐太神社の「牛馬安全守護」の護符があったり、現在とは神社の名称や祈願内容も違っていることが新鮮に感じられた。中でも佐太神社の「八百萬大神御玉串」と書かれた逆三角形のお札にはご神木の杉の葉が入っていた。一般に、逆三角形で中に榊や米などの呪物を入れた護符は江戸時代のものに多いようだ。お札の起源説には「固有信仰」「道教の霊印」「平安時代の仏教行事」説などがあるが、この佐太神社の護符は固有信仰にもとづくきわめて古い形式のものだといえよう。帰国後に同社の朝山宮司にうかがうと、このお札はかつて神在祭の期間のみに授与したが、現在ではご神木の葉を入れることはないという。ただ、神在祭の期間はご神木の葉に諸国から来訪した神々が宿るので、その重みで垂れ下がるという伝承のみが残っているそうだ。

■佐太神社の護符。

さらに、ハーンが出雲地方の護符を集めてチェンバレンに送付した際に同封した資料解説的内容の知られざる書簡が五通見つかり、ゼナさんがすべてコピーをとってくれた。帰国後に訳してみると、いずれもハーンの出雲の文化資源への暖かく好奇心に満ちたまなざしを感じるものだった。たとえば、一八九一年九月二七日付けの書簡には「私は汚れた紙と竹の棒を小包にしてお送りしました。――あなたは祈願の矢だと認知されるでしょう。（中略）出雲の地はどこもそういったもので満ちていますが、それを得るのは難しい仕事でした。――農民たちは田畑からそれを持ち去ることは悪運を招くという信仰をもっているからです」とある。いわゆる関札（せきふだ）を送付しているのだ。関札とは田植えの終了時期に美保神社に参詣し、授与してもらう農耕の安全と豊穣を祈る呪物で、当時、多くの山陰地方の人々はこれを矢に取り付けて畦にたてた。美保神社の講員も十万人いたという。入手に困難を伴ったことは人々のナイーヴで厚い信仰を物語る。

■八重垣神社の護符。

また、一八九一年四月五日付けの長大な書簡では八重垣神社や意宇郡の神社（武内神社・真名井神社・六所神社・神魂神社）を訪ねた印象を記しているが、その内容を作品「八重垣神社（『知られぬ日本の面影』所収）」と照合すると、ハーンは八重垣神社に奉納された竹筒を入手し護符とともにチェンバレンに送ったことが明らかになった。現在の八重垣神社には竹筒を奉納する習慣はみられないが、佐太神社などでは、現在でも年忌法要に際し、海水を竹筒に汲み、ホンダワラという海草とともに神社に奉納する風がみられるが、当時は八重垣神社にもその習俗があったのだろう。博物館に収められた五通の手紙は明治二十年代の出雲地方の民間伝承の記録でもある。

データベースのプリントアウトも資料のコピーも、イギリスでは基本的に無料で「リサーチ・ヴィジター」に提供される。ありがたいサービスである。でも、決して日本のように学芸員が日常的に残業するということはない。いくら作業の途中であっても、五時前には仕事を切り上げなければならない。当然、こちらもイギリスの流儀にのっとって遣り残した撮影は翌日に回すことにした。

＊

翌日は、博物館の展示ケースの下部にある大きな引き出しを見せてもらう。主要なものはほぼ昨日、別室で撮影したつもりだったが、まだまだ引き出しの中には出雲の護符が雑然と入っていた。春日神社、須衛都久神社、賣布神社、安楽寺……、おもに松江市内の神社の護符が見つかった。安楽寺のお札には「西津田村」と書いてあったが、これが鬼子母神をまつる「津田明神」のことだとわかったのは、帰国後数ヶ月もしてからのことだった。

瞬く間に時間がたち、不完全なリサーチしかできぬままにオックスフォードを去る時が来た。しかし、出雲の護符については、八割方は見つけたつもりである。結局、今回の調査旅行で確認できた出雲の護符類は以下の通りである。

寺社別の内訳は、安楽寺(松江市／1)・出雲大社（出雲市／5）・一畑薬師（出雲市／3）・佐太神社（松江市／5）・城内（城山）稲荷神社（松江市／7）・須衛都久神社（松江市／1）・武内神社（松江市／1）・玉若酢神社（隠岐の島町／2）・日御碕神社（出雲市／2）・賣布神社（松江市／1）・美保神社（松江市／3）・八重垣神社（松江市／9）・不明（3）（計四三点、以上五十音順、（ ）内は所在地と点数）である。データベースに記載されていない資料として「春日神社御守」と「松江紙屋町延壽院、隠岐國峯山地蔵院」と記された護符がみつかった。さらに、もう二十点ほどの出雲地方の護符が未発掘の引き出しに見受けられたので、全体で約六十数点～七十点の護符をハーンが松江時代に収集したものとみられる。

なぜ、ハーンはこれだけの資料を集めてチェンバレン（オックスフォード）に送ったのか。それは第一に自分自身が護符の「熱心な収集家（devout collector）」を自認していたこと、そして護符を大切なフォークロアだと認識していたからだろう。また、もうひとつの理由は、当時のピット・リヴァーズ博物館長のタイラーをとても敬愛していたことだ。ハーンは、タイラーの代表作である『原始文化』（一八七一年初版）の一八九一年版を愛蔵し、精読していた。タイラーがハーンの傾倒するハーバート・スペンサーの社会進化の考え方を受け入れていること、アニミズム（精霊信仰）に関心があったこと、また自分と同じようにカリブ海での強烈な異文化体験によって、人類学者の道を歩み始めたことなど、共感する生き方があったからだろう。事実、ハーンは「タイラー博士のお役に立てれば光栄だ」と認めた手紙を松江からチェンバレンに送っている。

＊

さて、ハーンが出雲地方で集めた護符類は出雲の文化資源としての一定の価値をもっているのではないか。お札は国の文化財になるような資料ではないが、民衆のもっとも身近な呪物として生活慣行の中に息づいてきた文化資源である。毎年更新するものなので、発行者である神社側も一般に保存することはない。そして、近年、神棚の小型化や神棚のない家の増加、奉整業者（護符作製業者）の関与、また神社からお札を郵送するケースも増えているため、護符は小型化・薄型化が進み、形態も祈願内容もかなり変化しているからだ。そもそも日本の護符も中国の護符も、おもに西洋人の研究者によって明らかにされてきたという経緯があり、それは日本人や中国人にとって護符はあまりに身近な呪物であるゆえに客観化しにくかったという理由ではないかといわれている。

■安楽寺（津田明神）の護符。

じっさい、ハーンのお札収集は、ベルナール・フランク（一九一七―一九九六）というフランス人の仏教学者に大きな影響を与えた。フランクは、「ラフカディオ・ハーンを通じて私は日本を知った時、神仏分離政策の後であったにもかかわらず、その時代に出雲やその他の地方で、神道と結び着いて実際に信心、実践されていたそのままの、生きた宗教をみることを学んだのである」（『日本仏教曼荼羅』）と述べ、自らも来日して寺社の護符収集を行った。一九五四年五月の来日早々に、上野清水寺ではじめて護符を求めた時のことを同書で次のように述懐している。

「……対岸の丘の階段を登った所に上野清水寺があった。（中略）そしてそこにはお札があって、ハーンの弟子を任ずる私は勇んでそれを求めた。それが私の長いコレクションの歩みの第一号となった」

以後、フランクはみずから、二千以上の寺社を巡って護符を収集し、日本の民間信仰と仏教教義との融合について研究し、「お札博士」と呼ばれるようになった。

オックスフォードの小さな「出雲」は、日本では看過される傾向の強かった護符研究の限りない可能性を孕む卵なのかもしれない。

ひととおりの目的を終えた三日目の夕方、博物館に別れを告げた。夕方といえどもまだまだ日差しがきつい。街中の古風なパブであまり冷えていない地元のエールを、再訪を願って味わった。

（こいずみ・ぼん／民俗学）

■ピット・リヴァーズ博物館の館内。

ASEANの仲間たち

「東南アジア青年の船」体験レポート

白岩朋子

■青年の船『にっぽん丸』。

みなさん、こんにちは！　そして、お久しぶりです。私は、『のんびり雲』創刊準備号で「マイ・オージー体験記」を執筆させてもらいました白岩朋子です。二〇〇七年にここの短大を卒業して、現在は高知大学四回生です。今回は、私が高校生の時から参加を熱望してきた「東南アジア青年の船」の体験をレポートさせていただきます。

「東南アジア青年の船」と聞いて皆さんは、どういったものをイメージしますか？　よく「ピースボート？」と聞かれるのですが、違います。これは、内閣府の青年国際交流事業の一環として行われているプログラムです。日本青年約四十人とASEAN十カ国の青年約三百人の合計約三百四十人の青年たちが、五十日間程度、船内で共同生活をしながら、ASEAN加盟国五カ国を船に乗って訪問します。

◆青年の船にあこがれて

船との出会いは、高校三年生のときの帰国報告会でした。今でもそのときに受けた衝撃は忘れられません。話を聞いている間、鼓動は高鳴り、その日以来、しばらくそのことばかりを考えていました。あれは、まさに恋をした瞬間のようでした。

それから短大に入学し、多文化共生ネットワークというサークルに所属し、リーダーとなって国際交流活動に参加していくうちに、船への想いはさらに募っていきました。東南アジアの国々で、私が今まで興味を持っていた多文化共生の現実と可能性を直接見て、肌で感じ、考えたいと思うようになり、また、参加青年とのディスカッションにも魅力を感じ、応募を決意しました。

よく、「どうやったら（船に）参加できるの？」と聞かれます。船に参加するためには、いくつかの試験を受けます。ここで大切なのは、自分の気持ちを素直に伝えること。なので、難しく考える必要はありません。まず、一次試験は都道府県別に行われます。内容は都道府県によって異なりますが、私が受けた高知県では、作文などを提出し、試験当日は面接と英会話試験を受けました。

一次試験を通ると、次は二次試験となります。場所は東京で行われます。受験者は、四～六人程度の少人数に分けられて、グループで行動します。試験内容は、筆記（一般常識・世界情勢・小論文）、面接、グループディスカッション、英会話です。みんながライバルのはずなのに、お互い助け合ったり、励ましあったりと和気あいあいとした雰囲気でした。今考えると、この頃からみんな協調性に富んでいたように感じます。

二次試験を突破した約四十人の青年は選考試験の最終段階、一週間の事前研修に参加します。この最終日にめでたく参加青年として国から認めていただきます。

■デッキで行った運動会 “SSEAYP リンピック”。

◆イザッ！　出港！

――二〇〇七年十月二十三日～十二月十二日

各国の参加青年と出会って、船に乗ると、そこはまさに多文化共生の縮図でした。私が目標の一つとしていた多文化共

生を肌で感じることは、すぐに実現されました。民族、文化、言語、習慣、そして宗教……すべてが新鮮で興味深いものばかりでした。船内では英語によるディスカッション、各国事情の紹介、クラブ活動、スポーツ交流などを行い、訪問国では、その国の青年たちとの交流、ホームステイ、ボランティア活動、各種施設の訪問などを行います。

船では、みんなが同じ屋根の下、同じ釜の飯を食べます。しかし、全ての食事はビュッフェ形式です。なぜならば、日本や東南アジアの国々には多くの宗教が存在しており、それぞれ食べてはいけない物が違うからなのです。よくメニューのそばにはPORKやBEEFなどの表示がしてありました。特に豚肉はイスラム教の人々に配慮して、人気のない所に追いやられていました。こういった配慮も、多文化共生には必要なことなのだということを学びました。食事からでさえ、私はこのように多くのことを学びました。

さて、このビュッフェ形式のごはん!!参加青年からも評判が高く、知らない間に体重が数キロ増加なんてこともよく聞かれました。腕利きのシェフが作るごはんは本当に美味しかった〜☆

ディスカッションは、「青年の社会参加」というテーマのもと、八つのグループに分かれて行いました。教育、環境、異文化理解などのうち、私は「伝統文化」についてディスカッションしました。最初は、英語がよく聞き取れず、言いたいこともうまく伝えきれなくて、ただただ悔しい思いをしていました。しかし、お互いに、伝えようと努力したり、理解しようとすることで、乗り越えられたと思います。時には、各国の伝統的な子ども遊びを取り入れて息抜きもしながら、各国の現状を話し合い、共に悩み、考え、今の私たちにできることは何なのか真剣に話し合いました。

私の参加した年は、横浜を出港してからシンガポール、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナムに寄港しました。各国で国賓レベルの歓迎を受け、表敬訪問やホームステイを経験しました。そのどれもが、一日一日が、私にとってかけがえのない貴重な経験でした。ここでは特に、滞在中最も印象に残ったマレーシアでのエピソードを紹介しようと思います。

マレーシアに滞在したのは四日間でした。ホームステイ家族と初めて面会する式で、かわいい子ども達が私たちの所に走り寄ってきて、手を取ってお父さんの所まで連れて行ってくれました。私がお世話になった家庭は、両親と子ども四人の賑やかな家庭。両親をはじめ、特に子ども達は、私たちの到着を心から楽しみにしてくれていて、そのホスピタリティあふれる仕草一つひとつが可愛くて仕方ありませんでした。滞在中、彼らはあまり英語が理解できず、ほとんど言葉が通じませんでした。しかし、私はファミリーの心がこもった温かいもてなしに、心を打たれました。決して贅沢なことをしてもらったわけではありません。しかし、異国から来た私を三日間、大きな笑顔で包んでくれたファミリーに感謝の気持ちでいっぱいです。本当の、豊かな「おもてなし」とは、贅を尽くすことではなく、「笑顔」で受け入れることなんだということを学びました。

ステイ中は彼らに、美術館やお寺、歴史的な建造物などに連れて行ってもらいました。中でも印象的だったのは「ハーモニーストリート」と呼ばれる場所です。そこには、イスラム教のモスク、中国のお寺やインドのお寺が並んで軒を連ねていました。世界では宗教が原因の戦争が起きているのに、そこでは様々な宗教が争いの原因になることなく存在していることに驚きを隠せませんでした。それらの建物は何の違和感も衝突もなく町に融合し、マレーシアの「多文化共生社会」を象徴しているようでした。

◆船を降りても活動は続く

船のプログラムは事後研修を合わせて全部で五十三日間でした。しかし、私たちがよく口にしていたのは「大切なのは、

■キャビンメイト――インドネシア、ミャンマーの参加青年と。

■マレーシアでお世話になったホストファミリーの子どもたち。後ろ2人が参加青年（カンボジア、日本）。

■ベトナムでお世話になったホストファミリー（左３人）と、右から日本（私）、マレーシア、シンガポールの参加青年。

船をおりてから！」ということでした。私たちは、船で貴重な経験をさせてもらいました。ここで学んだことや、ここで得た「つながり」を自分たちだけのものにせず、終わりにせず、社会の多くの人々に伝えていきたいという思いが膨らんでいきました。私も含め多くの既参加青年は、プログラムが終わった後でも精力的に「事後活動」を行っています。ここでは、私の活動の紹介をしていきたいと思います。

まずは帰国報告会！　事業の一環として行われる帰国報告会はもちろん、それとは別に、仲間たちと一緒に自主的に、鳥取と大阪でも行いました。もちろん、企画から運営まで全てオリジナル！　分からないことだらけでしたが、先輩たちに助けられ、仲間とも励ましあい、どの会場でも大盛況のうちに終えることができました。

事後活動は報告会だけではありません。なんと、こんな私に講演依頼まで来てしまいました。高知大学の「大学学」の時間に、既参加青年として、新一回生向けに講演を依頼されたのです。パワーポイントを使い、緊張しながら一生懸命プレゼンテーションした思い出は宝物です。なんとこれだけではなく、取材依頼や執筆依頼もありました。「高知大学キャンパスニュース」の取材を受けただけではなく、この『のんびり雲』の執筆依頼も頂きました。

事後活動には、受け入れスタッフという仕事もあります。私は今、平成二十年度の東南アジア青年の船の地方プログラム受け入れスタッフとして活動しています。高知事後活動組織（高知ＩＹＥＯ）において、事務局長として、そして受け入れスタッフとして、参加青年をサポートしています。去年のプログラム中は、多くの方々が私たちをサポートしてくれたからこそ、大成功のうちに終えることができました。そのときの感謝の気持ちを忘れずに、今度はサポート側の立場で力になっていきたいと思うのです。それが私の今の目標です。

船に参加するまでの私は、講演や取材、執筆を依頼されるようなことはありませんでした。しかし参加後には、船での「つながり」を通してこのように精力的に活動するさまざまな機会を与えられています。信じられないことですが、これも船の大きな魅力だと思います。これからもこのような活動を「楽しんで」やっていきます！

◆あなたも「世界」を語る「仲間」になりませんか？

右のタイトルは、ＩＹＥＯ（事後活動組織）のキャッチフレーズです。ここまで書いてきたように、私の活動は船を下りた今でも、まだまだ続いています。私だけでなく、多くの既参加青年たちが、ずっとずっと、日本と東南アジアの「つながり」を維持し、新たな「つながり」を求めながら活動を続けています。グローバル化が進む社会を生きる私たちは、もう「世界」と無関係には生きていけません。あなたも、この豊かな「つながり」を担う仲間になりませんか？　私たち既参加青年が全力でサポートします！

もう一度ここで船を振り返ると、あれは本当に夢のような時空間でした。一瞬一瞬が、かけがえのない思い出です。船でつながった日本―東南アジアの青年は、これからも、各国の懸け橋となるために、繋がり続けていくのです。支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちを忘れずに、この経験をもっと多くの方に伝えつづけていきたいと思います。

（しらいわ・ともこ／二〇〇七年英文専攻卒業、現在高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科四年生）■

■（上段）クラブ活動の時間に茶道を紹介。（下段）お別れ。出港の際にホストファミリーにテープを投げます。毎回、涙で前が見えません。

■ 2008年4月20日、松江でのライブ。

松江市内。地下に埋まった箱の中で響く轟音。ぎゅうぎゅうに詰まったファンたちの前でパフォーマンスをするのは、Supe。一九九五年に結成し、二〇〇三年に現在のメンバーでの活動を始めた。彼らの普段の活動の場はアメリカ。一台の車で寝泊りしながら移動し、あちこちでライブをしている。そのメンバー五人のうち三人――Takeshi、RyoZ、Toru――は、島根県松江市出身である。

今回は、TakeshiさんとRyoZさんの二人に話を聞いた。

松江のエネルギーを世界へ

◆松江出身3/5ロックバンド Supe

宇山愛花

「きっかけ」と「答え」が同じ場所にあった

Supeの活動の場は主にアメリカ。何故、日本ではなくアメリカでの活動なのだろうか？

まず第一に、ロックの本場はやはりアメリカ。「英語の歌詞でパフォーマンスをするのだから、アメリカでやるのが普通だろう」というのが彼らの考えである。日本にもロックバンドはたくさん存在する。しかし、英語の響きがカッコイイからという理由だけでやっていたり、文法がめちゃくちゃな歌詞のバンドも多いのだそうだ。「カッコよさプラス、メッセージを伝えたい」ならばアメリカ――言葉の伝わる場所――でやってみるべきだろう。

高校生の頃からの憧れでもあったアメリカでの二週間のツアーに参加し、「アメリカでロックを」という思いは更に強くなった。アメリカでのライブは、日本のそれとは違い、生活と一体となっている。日本人なら「仕事帰りに一杯」という感覚で、アメリカ人はライブスペースに行き、また、午後のひと時にプラスアルファで音楽が入る。ライブのスペースがあるレストランやカフェ等も多く、ロックに限らずアーティストの表現の場がたくさんある。また、ロックを楽しむ年齢層も幅広く、年配の方も一緒に楽しんでいる。七十代くらいの方に褒められたときには「純粋に感動」したという。いろいろな人に褒められ、評価されることで、自信がつき、まわりに育てられていることが実感できるのだそうだ。

アメリカは……とにかく「でかい」

「日本とアメリカのギャップは？」と尋ねれば、「でかい」の一言。国も人も

■取材中の Takeshi さん（左）と RyoZ さん（右）。

建物も、とにかくでかいのだそうだ。また、日本でライブをする際には設備が整っているのが当たり前になっているが、アメリカではライブハウスに機材が無かったり、準備、セッティングから自分たちで行ったりするのだそうだ。設備が無くても、悪くても、環境に関係なく楽しめる。人々が楽しみ方を知っているのである。

ライブを行っている時間も、日本では大体十八時～二十二時程度であるのに対してアメリカでは二十時～二時頃と、夜中まで行っている。ライブが終わると、次のライブ会場まで十七時間もかけて移動するような、タフなバンドがたくさんある。皆がプライドを持っていて、またハングリー精神が旺盛である。有名でなくても、アマチュアバンドでもギャランティー（出演料）がもらえ、また日本のバンドのように、自分たちでチケットを捌くこともしないため、それぞれのバンドがプロ意識を持って活動している。

コトバは大きな壁だった

会話は五年で困らなくなった。しかし、初めはなかなかコミュニケーションがとれなかったそうだ。“I don't know”（わかりません）という言葉で逃げてばかりでは、会話ができない。まずは、“Pardon me?”（もう一度言ってください）と、相手の言葉を聞こうとするようになることが大きな一歩になる。褒めてくれている相手の言葉がわからない、相手の「よかったよ」という言葉を聞きたい、聞いて、「ありがとう」と応えたい思いで、“I don't know” から “Pardon me?” に変わった。

ひとつひとつがステキな出会い

アメリカでの活動を通して、たくさんの出会いがあったそうだ。ライブを終えると、よかったよかったと、声をかけられる。それだけでなく、「うちに来い」と誘われることもよくあるそうだ。次の予定が無ければ、布団と枕を抱えてお邪魔する。車で生活している彼らにとって、家の中で寝られるだけでなく、風呂にも入らせてもらえるというのはとても嬉しいことだ。食事は、ご馳走になるだけでなく、お返しに日本食を作ってあげることもある。アメリカで寿司を食べようと思うと高いため、巻き寿司を作って振る舞うと喜ばれるのだそうだ。

あちこちでそうやって声をかけてもらい、各地に友人ができ、また「家族がいっぱい」いるようだという。そうやって誘ってもらったときに遠慮をしていては自分たちが損をする。甘えられるところは甘え、そのぶん自分たちは、他の何かで返すのだ。その「何か」が、彼らの場合は音楽だった。

小さいストレスから徹底的に排除

アメリカでの生活で一番困ったのは食文化の違い。どれだけ長くアメリカにいても、やはり日本人の体には日本食が合う。アメリカ人と同じ食生活では、身体がおかしくなってしまうのだそうだ。そのため、炊飯器を持ち歩き、一日に一食は必ずご飯を食べる。食事は、食材調達から調理まで各自がそれぞれで行う。ご飯は共同で炊くが、それもきっちり五等分する。例外的に、カレーやシチューなどはバンドのお金で購入し全員分まとめて作ることもあるそうだ。泊まるところが無いときなどは、車のバッテリーを用いて湯を沸かしたり、調理をすることもあるそうだ。

アメリカは人種のサラダボウルと言われるほど多種多様な民族が混在して暮らしているため、それぞれの民族に合ったスーパーが各地にあり、そういったスーパーでよく買い物をする。インスタントラーメンはよく買い置きをするそうだが、十個で一ドルだというアメリカの maruchan は、やはり日本のそれとは違う。韓国のものは美味しくて口に合うが、価格が高いのだそうだ。買い物は、それぞれのポケットマネーを使用し、出演料や物販での売り上げ等は使わない。

買い物は現地のスーパーでするが、調味料は日本から持って行くものもある。調味料にはＴａｋｅｓｈｉさんが一番こだわっているそうだ。自ら持参した調味料で酢豚や、肉じゃが、豚の角煮、マーボー豆腐なども作るＴａｋｅｓｈｉさんは「シェフ」だとＲｙｏＺさんは言う。Ｔａｋｅｓｈｉさんは、自分で食べるだけでなく、それらの料理をメンバー相手に「売る」こともある。また、食事による体調管理なども自分たちで行わなければならないため、野菜をしっかり摂る

■アメリカでの移動はこの車で。

■泊めてもらった家の人たちと。

ことにも気をつけるようにしている。身体が資本である彼らは、病気になったらおしまいであり、風邪は「ひく前になんとかする」ものなのだそうだ。

食事の面でご飯をきっちり五等分するほか、お金の貸し借りも基本的にしない。金銭面もきっちりしておかなければケンカの種になる。「仲間」であると同時に個々の個人なのだから、共同生活をしていれば衝突も起こる。「長く付き合うのだから、くだらないことでケンカはしたくない」。そのためには、小さなストレスから徹底的に排除するべきなのだ。

「二～三月に日本でアルバイトをして、六月に渡米」といったふうに、資金は日本でアルバイトをして貯めていた。しかし、デビューが決まり、バンドも軌道に乗ってきたので状況も変わりつつあり、これから先どうなっていくのかはわからない。

車の中は私物と機材でパンパン

彼らのアメリカでの移動手段は車。いま乗っているのは三代目なのだそう。以前は、自分たちで車を買い、壊れたら修理しながら活動していた。しかし、日本で後援会を作ってもらい、新しい車を買ってもらうことができたのだそうだ。

車の中は私物と機材でパンパン。かろうじてメンバーが横になるスペースが確保できる。移動の際の運転はローテーション。交代で睡眠をとりながら移動する。テキサスを中心に一カ所あたり一週間～十日ほど滞在する。

アメリカは銃社会。場所によっては銃声が当たり前のように聞こえたり、車上荒らしも頻繁にあるのだそうだ。一番の恐怖体験は、フリーウェイを走っていたときのこと。誤ってトラックの検査レーン（トラックの荷物検査をするところで、トラック以外は進入禁止）に入ってしまい、車を止められ、降りたところで「手を上げろ」「後ろを向け」と銃を向けられたときには本当に恐かったそうだ。

■サイン会で子どもたちと。

テキサスのこと

Ｓｕｐｅはアメリカ南部を中心にツアーを行い、これまでに十三、四の州に行ったことがある。その中でも、行く回数が多いのはテキサス。州によって住んでいる人の人種が違い、好む音楽も違う。北の方はあまりロックを好むイメージではなく、今まで行った中ではテキサスが一番馴染める場所なのだそうだ。テキサスの人々は人柄がよく、特に親切にしてくれる。日本人のバンドであるＳｕｐｅをヘッドライナー（複数のアーティストが合同で行うコンサートなどにおいて「トリ」を務めるアーティスト）として扱ってくれたこともあるのだそうだ。このことは、Ｓｕｐｅにとってのひとつの大きな出来事であり、ステータスとなる出来事だ。「あれ嬉しかったなー」と感慨深げに言うＲｙｏＺさんは、本当に嬉しそうだった。

息抜きにはどんなことをするのかと尋ねてみると、「無いんじゃない？」という答え。ショーが終わったあとの飲み会がそれに近いのかもしれないが、アメリカでは息抜きは無いという。けれど、ショーをして出演料をもらってはいるが、仕事という感覚ではないため、常に好きなことをやっているというイメージで、いわばライブ自体が息抜きなのだそうだ。

アメリカではほとんどストレスを感じることはなく、今、日本にいること、バイトをしている間の方が、ストレスを感じるという。ツアーに出ている間は、やることが明白だから楽しく、三カ月があっという間に過ぎる。アメリカに行ってからは、時間が過ぎるのが速く、やりたいことが見えているこれからは、もっと速くなるだろう。

松江のエネルギー

Ｓｕｐｅのメンバーのうち、ＡＲＩとＫｉｈｉｒｏは、アメリカやタイ、インドネシア、シンガポールなどに在住していた。残りの三人は松江の出身であり、彼ら五人にとっては松江がホームグラウンドのようなもの。松江をどう思うかと尋ねれば、Ｔａｋｅｓｈｉさんは「めちゃくちゃきれい」と、まず一言。宍道湖は幻想的で、嫁ヶ島は神秘的。城があるってすごいな、城下町ってすてきだな……などと松江のイメージを挙げ、「島根には、土地が持ってるエネルギーがある」という。

松江に帰って来た際には、松江出身の三人は実家に、他の二人はそれぞれ友人の家に泊めてもらう。……そんな話のあと、しめくくりに二人は、

「助けられてるからねー」

「ここまで助けられてるバンドもいないんじゃない？」

「ほんと、厚かましいかぎりだよな」

と、笑顔で話してくれた。

（うやま・あいか／文化資源学系二年生）